

WAB 失語症検査（日本語版）作製委員会
代表 杉下守弘（東京都神経研究所）

WAB 失語症検査

日本語版

岩 田 誠（東京大学神経内科）

何事によらず、科学的な観察の出发点には常に、「分類」と「計量」が必要である。しかし「分類」も「計量」も、確定された標準的なものでない限り、かえって混乱を招くのみとなってしまう。とくにヒトの現象を扱う科学においては、万国共通の、確固たる分類法と計量法を持っていることが必須の条件といえよう。『WAB 失語症検査 日本語版』は、失語症研究におけるこのような万国共通の「分類」と「計量」の規準を与えてくれるものである。

日本語版の原典となったものは、Kertesz により発表され、その有用性と信頼性が国際的にも充分に確立されている“The Western Aphasia Battery”（WAB）であるが、この検査は、失語症検査という、極めて時間のかかる、複雑で厄介な検査を、コンパクトにし、しかも、検査本来の目的である失語症の病型分類と重症度の計量化を、充分に行ない得るようにした点において、大変高く評価されている。とくに従来の失語症検査と異なり、各下位検査の得点から、失語症の病型を比較的容易

に分類できる点において、整然とした検査結果を導き出すことができることは、検査を行なう上でなによりも便利であろう。このような原典の意図は、日本語版においても、充分に実現されている。

日本語版は、日本の失語症研究の最前線にある研究者が、細心の注意を払って改変されたものである。とくに、欧米と日本との生活環境や文化の違いに応じて、問題の内容が適切に変更されており、その変更の理由については詳細な記述がなされている。日本語版の作製者の方々がとくに苦心されたものに、恐らく、仮名と漢字という日本語の文字体系を、このテストの中にいかにして盛りこむかという点があったことと思われる。とくに、原典にある「綴りからの語の認知」および「語の綴りの記述」とかいう検査項目を、それぞれ漢字の「へん」と「つくり」の問題に改めてあることには、日本語版の作製者の方々に拍手を送りたい。

この検査のもうひとつの特徴として、失語症状以外の高次脳機能障害、とくに失行症や、視覚構成

障害などをあわせて検査のできる点がある。これにより、言語能力のみならず、外言語的な高次脳機能障害、さらには全般的な知的能力の障害に至るまでを、計量的に評価できることは、臨床の現場では大変に便利であろう。とくに、日本語版では行為障害の評価を左右に分けて行なうよう改変されており、この点でも、原典を越える一層詳細な分析が可能となっている。

だが、このような神経心理学検査に共通のこととして、検査用具、とくにカードの保存に関して、ひと工夫なされてもよかったかもしれない。この大変有用な検査法を使用する検査者は、恐らく、100枚以上におよぶ数の検査カードや、呼称テストに必要な20種の物品などを、常に使用できる状態で保管するために、なんらかのケースや箱を揃える必要性を感じるであろう。もしこれが予め用意されておれば、さらに便利であったかもしれない。しかし、本検査を使用する者にとっては、このようなことは枝葉末節であろうと思われる。失語症の診療および研究において、本検査が、日常的に広く用いられるようになることを望むものである。

（B5・頁110 検査カード103
¥9,000／記録用紙 B5・20部
1セット ¥2,500 1986 医学
書院 刊）